
呪をもらって魔法学園生活!!(書き足し版)

加々美由亜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

呪をもらって魔法学園生活！！（書き足し版）

【Nコード】

N6482J

【作者名】

加々美由亜

【あらすじ】

西暦2015年。人類に新たな神秘、『魔法』という物が誕生した。それは、本来人類が聞いているような非現実^{オカルト}ではなく、理に適った科学的な物。これは、そんな『魔法』を使う『魔法使い』達が集まる『魔法学園』で生活する者たちを描く物語。【新しく書き直し、様々なものを追加して、『呪をもらって魔法学園生活！！』リスタートです！】

第一：幕開けにケルベロス！！？ part 1

『魔法』と言う物は、この世の誰かが思っているよりも難しく、この世の誰かが思っているよりも簡単な物だ。そんな複雑な物を扱うのが『魔法使い』。その魔法使いを育てる機関を『魔法学園』と言う。

そんな魔法学園、『まりつきさくらぎかくえん魔立如月学園』の中でも、最年少の生徒達が学ぶ、中等部一年校舎の一室、1年C組の教室の自席で、古びた書物を読みふける一人の少年がいた。

見たところ、かなり古い本だ。RPGとかに出てくる古代の魔導書みたいなものを思い出させる。そんな本を読んでいる少年の名前は篠原葉月。しのはら はづきまるで少女のような顔立ちをしていて、青紫色の髪は、ルビーのように輝き、血のように深い赤色の目を隠すかのように長い。

学校が私服制なためか、彼の服装は、膝元まである黒いロングコートコートを赤いシャツの上にチャック全開にして着ていて、スポンはコートと同じ、黒い色のビニール製の物を履いていた。

一見、奇妙な服装だが、本人はそんなものの気にしていない。着れば何でもいいのだ。ロングコートの理由は寒いから。決して夜道に裸体で出てくる「私を見て！！」的な変態どもとは全く違う。

そんな彼は、単にボーっとしているだけで、何も見ていない様な表情でその本のページをめくる。

「葉月！！！」

葉月は自分の名前を誰かに呼ばれる同時に、パタンと本を閉じ、声のした後ろを振り向いた。否、振り向こうとした瞬間にもう既に横にいた。そこにいたのは、こちらとしては残念なことに、我

が双子の姉の篠原愛海^{しのはらあいみ}だった。

似ているを通り越して、まるで鏡で写したかのように葉月と瓜二つな彼女の顔は、常時ムスツとして、落ち着いた葉月とは反対に、彼女は明るく無邪気で、おてんばさを感じさせると同時に、愛らしい何かを感じさせていた。

髪は肩口まで伸ばし、それにカチューシャをつけていて、瞳の色も髪と同じで茶色い。互いの髪の色が違うのは、どちらかが染めたとかではなく、原因は、『魔力式色素異常症候群（Change Of Color Syndrome）』という、まあなんとも長つたらしいものの症状にあるわけなのだ。

この『魔力式色素異常症候群』、通称『C O C S（頭文字とっただけ！）』。別に人間の体に害があるわけではない。ただ、魔力というのは、人間の色素に異常をもたらす効力があつたらしく、当時、魔法が発明されて間もないうちに、世界中の人間の髪や目の色に異常が出たときは、すごい騒動になつたらしい。それは今からおよそ50年も前のこと。

そう。そもそも魔法が一般的になつたのは、そんな昔じゃない。それどころか凄く最近だ。正確に言えば、2015年8月〜10月にかけて、正式にそういうものがあることを学界から発表されたのだ。

それはさておき、この目の前の少女なのだが……。

「あ……………はあ……………」

あまり会いたくない相手を視界に入れてしまった事を後悔して、小さく、だけど深くため息をつく。

「ちょ！　なによそれ！　しかも今朝私を置いてけぼりにしたでしょー！」

葉月に対し、朝っぱらからこの大声。 まったく鬱陶しいことだ。この声に反応したクラスの何名かがこちらを振り向いた。

明らかに怒っている感じに葉月を見下ろしているそのいつの服装は、何かちよつとおかしかった。 なぜなら、セーラー服を意識した彼女の服装は、私服製のこの学校には明らかに不釣り合いだったからだ。さらに、短くしたスカートのしたには黒いスパッツを履いている。おそらくスカートは短くしたいけど、中は見せたくないという気持ちを表したものでだろう。

こういう何かが矛盾しているところが、葉月には理解できない。無論、する気もない。 再度ため息をついて口を開く。

「だったら早起きする努力をするんだな。 ちなみに、僕は一回はお前を起こした。 だけどお前は、宇宙の法則が何とかを言い出して、結局は夢の中へと回れ右をしていた。 どうだ？ 僕はどこも悪くないだろう」

ちなみにコイツの宇宙に関する知識は、「木星って木ばっか生えてて、全然地面が見えない星なんだって！」と言う位のレベルである。 法則も何もあつたもんじゃない。

愛海は無愛想な返した葉月に対して口を尖らせる。 そんな表情も愛らしいと、周りの人間なら思うのだろうが、葉月には鬱陶しい以外の言葉は浮かばない。 むしろ腹立たしい。 もちろん自分に降りかかる被害を考慮して、本人に言ったことは一度もないが。

「それでも起こしてよあ…… 女の子を待つのは、男の子としては当然のことだよ？」

一瞬葉月は眉間にしわを寄せる。 何が女の子だよと、心の底から思ったからだ。 趣味は食っちゃ寝、家の中での基本装備はジャージまたは下着一丁。 髪はこの前まで葉月が手入れをしていたく

らいだ。 やっていた自分もどうかしていたが。
しかし、すぐにいつもの平然とした顔に戻る。 何時までも怒っている表情をしていたら愛海がうるさいのだ。

「姉に隅々まで気を使う弟が何所に居るのか？ 特別な愛が芽生えているわけもないんだから」

「私はあるよ！ 私の財布には葉月と私のツーショットが入ってるし、昨日の夜だって、もう寝ていた葉月の頬にチューしといたし、荷物を纏めるときだって、葉月の葉月の下着上下ワンセット自分の荷物に入れといたし！ 今だって」

「待て！ 一つ目は知ってるし二つ目もはや置いておくが、最後の奴は聞き捨てならないぞ！？ そして今衝動的に遮断した、お前今だつての後なんて言おうとした！？」

「……………」

「そこでめをそらすな！」

もはや爆弾発言を超えて核発言とも言えるような言葉に、葉月は鳥肌が立ちそうだった。 頬に関しては朝の時点で自然的に顔を洗つてあるので問題は無いが、下着に関しては後で取り替えそう。 命を奪う結果になっても。

葉月は右手首に付けてある腕時計を睨み付けた。

「そろそろか……………」

「…………そだね」

その葉月の言葉がスイッチだったかのようになり、愛海の顔が真剣になった。

「魔法名か…………」

魔法名と言うのはこの学校で入学同時に貰う、学園内での仮名だ
と思えばいい。この魔法名を貰うことによって、始めて『魔法』
という物を使えるようになる。逆に言えば、魔法名がなければ魔
法は使えないのだ。

魔法の原理は、魔力という精神力エネルギーの一種で大気中の元
素を操り、形を作るというだけ。ただそれはあくまで、原理と理
論を並べるのが簡単なだけであって、通常の間人では出来ない。

だからそこで、魔法名を用いる。魔法名という一種の暗示を掛
け、人間の脳の使用率を極限まで上げ、人間の体に眠る『超能力』
を引き摺り出す。そして、その超能力で、自分の体内の精神エネ
ルギーを使い、元素を操り、形を作る。こうして聞くと、魔法と
いう物が、凄く科学的なものに聞える。

実際そうなのだ。人類が数年前まで聞いていたオカルト的な魔
法とはまったく違い、この世にある魔法とは、とても理に適った科
学的なもの。

しかし、良い事ばかりと言う訳では無い。この魔法名を与えら
れた瞬間、中学、高校での6年間はこの学校の外へ出れなくなる。

これが原因で『呪名』と呼ぶ人間もいるらしい。

だが、夏休みとかになればそのときだけ解放されて、家に帰るこ
とができるようになる。さらに、この学園は全域合わせてバチカ
ン市国の4倍近い面積を持っているという位無駄に広い。

その領域内に、コンビニ的な店や、ファーストフードや喫茶店、
ファミレスの様な飲食店。ゲームセンター。お金を引き降ろす
為の銀行。私服を買うためのブティックの様なところもあるため、
不便と言う点があまり無い。

だから、魔法名を貰うことに何も異論は無いはずなのだが、葉月
は少し気に入らなかった。気に入らないと言うよりも、何かが引
つかかっていた。

「? どしたの、葉月?」

「え……？」

そう色々考えている間に突如姉の声が混じり、ハツとし、ただど慌てはせずに愛海の顔を見る。

気付かぬうちに眉間に皺でも寄っていたのか、愛海は心配そうな表情で彼を顔を覗き込んでいた。

「いや、なんでもない……」

そんな彼女にややぶつきらばうにそう誤魔化した。この愛海という少女は、弟である葉月のことを良くも悪くも大切に思っている。しかし、その思いはやや過剰で、しかも姉のというよりは、どちらかというとい妹のような甘えのようなもので、葉月は少々参っていたりするのだが。

（ま、そこまで嫌とは思ってないけど……）

そんなことを思ってみると、いきなり教室のスライド式ドアが開き、分厚い眼鏡をかけた女教師が慌てた様に顔を出した。

「皆さん時間です！ 中学用ホールへ移動してください！ 席はEブロックの最前列から出席順に座って下さい！」

そう息荒げに言うと、すぐさま駆け足で去っていった。「廊下を走ってはいけない」というのは永遠の学校の鉄則であり、教師がそれを破るのは如何なものかと思ったが、どうでもいいので、普通に無視した。

「葉月」

「ん……じゃ、行くかな……」

「さあ行こう！」という思いを含んだ姉の呼びかけに、葉月はどこか重そうに腰を上げ、愛海と共に教室を出た。ちなみに、立った時の葉月の身長は、女の子の愛海よりも低かった。

第一：幕開けにケルベロス！！？ part 1（後書き）

皆様！大変お久しぶりでございます！

そして、何回も約束を破ってしまい。本当に申し訳ございません。

実を言うと、連載を諦めようとも思ったときもありました。

しかし、アクセス解析を見てみた結果。こんなにも長いこと連載していないのに、見てくれている人はいるんだな～と思い。頑張ってみようと思いました！

その結果。だいぶ遅れましたが、「呪をもらって魔法学園生活！！」を再開させることが出来ました。みなさま本当にありがとうございます。

で、今回の変更点ですが。

まず、長さですねw前回はまあ、一話目から相当長くしましたが、今回はそれを3～4分割程度に分けます。（さすがに長いのでw）そして、キャラの変更点ですね。

まず葉月のほうは、より淡々と、簡単に言えば、前よりもちよつと冷たい感じになりましたね。プラス、突っ込みも鋭くさせる予定で
すw

そして、愛海のほうですが、えゝ、彼女はなんというか、よりブラコンになりましたねwもう病的なほどにw

まあ、こんなところでしょうかw

では、もう既に長いので、今回はこの辺で。

さい先不安みたいになってしまいましたが、皆様、どうかこの「呪をもらって魔法学園生活！！」をよろしくお願いします！

では、失礼します！

第一：幕開けにケルベロス！！？ part 2

葉月たちの教室がある校舎の向こう側にある、三階建の建物、『第二職員校舎』。

それを越えると中等部の人間が主に行く第二繁華街地区があり、そこをさらに越えると、生徒用の一般寮、または『フォースエンジンズ生徒会』や、『ジャッジメンターズ風紀委員会』、『セイントセイバース執行部』の為に作られた、一般生徒の寮よりも豪華な寮などが並んでいる住宅地みたいなところへと続いている。

中学用ホールは第二繁華街地区に当る部分の地下に存在するため、第二職員校舎のそばにある、地下へと続く広い階段を下る。そして、階段を下りきり、通路へと入る。

そこで少し歩いた左右前と分かれ道になっていたが、天井の、地下鉄でよく見る案内標識みたいな物に、右側が中等部三年生校舎前、前方が第二繁華街地区南口前、左側が中等部二年生校舎前と書かれていた。

「って、どれも違うじゃん！」

愛海はそういうが、しかし、生徒たちは、左角を曲がっていく。葉月も今曲がろうとしていたところだった。

「いや、生徒手帳に地図帳のつてるだろ。ああ、持ってきてないのかそうなのか」

そうまさにバカな人間でも見るかのような目線を愛海に一瞬送ってから、葉月は右手に持っているなんだか一世代前の携帯ゲーム機のような小型無線機に視線を移す。この無線機こそ、生徒手帳である。

昔は紙で作られたまさに手帳を使っていたらしいが、3、40年

ほど前からこういうタイプのものが使われるようになっていた。

ボタンはなく、ほとんど一面が液晶画面であり、タッチ操作で使用するものだ。ちなみに、なくした時、壊した場合の最購入額は1

800円。それでも安く設定してあるらしいが、バカにできない。

とりあえず、葉月は「だってそれ意味解らないんだもん！」とか言う姉を無視しながら液晶を見続ける。画面上でも分かれ道が多く、かなり複雑にはなっているが、先に目的地を検索してあるため、カーナビのように、矢印で示してくれている。

（まあ、こんなものなくても、この流れについていけば普通にたどり着けるんだけどね……）

葉月がわざわざ生徒手帳を取り出したのは、まあ簡単に言えば念のためである。実はこの流れ、全員が全員ホールへ行く一年生ばかりではない。

全員私服のせいであまりにいが、中には道の解らない一年生のために案内を務める『フォースエンジェルズ』や、『ジャッジメンタイズ』、または『セイントセイバス』などもあるし、他にも、入学式には参加しないで他の校舎へ行く教師。または、たまたまこの場所を通った上級生（これは少数）などもあるのだ。

葉月と愛海がそんな人間たちの作った流れに流されるまま歩いていくこと約5分。そこで迎えていたのは、城門の様な二枚扉と、その向こうに見える、あまりにも広大なホールだった。

天井はプラネタリウムのように丸く、幾つもの証明が照らしているが、このホールはやや薄暗さが残っている。無数の座席は映画館の座席と同じ様に平行だが、12つのブロック分けになっていて、それらが下る感じに奥にある大きなステージへと伸びている。

「うっわ何ここ広っ！ コンサート会場!？」

「声がでかい……席は知らされてるんだから、さっさと行くよ」

まだ少し人混む中、少し探ただけで見つけた、下った所の（Eブロックは右と前から二番目ずつのブロック）空いてる座席に二人は向かい、隣同士に座った。式が始まるまで一応まだ時間は余っていたので、葉月はいつもの、周りから見たら内容がまったくわからなそうな本を読み始め、愛海はもう座ったとほぼ同時に回りの女子達と喋っていた。

しばらくして、葉月がその書物を閉じるのとほぼ同時に女性の声が葉月や愛海の鼓膜に直接響いた。

『皆様。これより第17回、魔立如月学園の、入学式を始めたいと思います』

『魔術的通信法』^{マギカテル}だ。放送とかでは聞き逃してしまう可能性（

または隣のバカみたいにはなっから話を聞いていない可能性）があるから、空気中の音波の流れに伴って、対象の鼓膜を直接叩く方法だ。これを発動させた女性はかなりの実力の持ち主なのだろう。

その証拠に、今の女性の声を聞いたであろう辺りの生徒達の話し声が止み、辺りの空気が緊張の一角に染まった。

そもそも、『魔術的通信法』^{マギカテル}自体も高等術なのに、ホール内に居る生徒全員を対象に発動できるのは、相当な努力、または天才的な才能が無い限り無理だ。この学校の教師がどの位の實力があるかを、一瞬で証明した。

それでもボーっと本を読み続ける葉月だが、今の報せで明かりが消えた訳でもないものでゆっくりと読める。前から二段目、しかもほぼど真ん中という、ステージからは比較的見つきりやすそうな位置なのだが、あまりに気にはしなかった。

しかし何かが気になり、チラリとステージを見てみる。ステージに居る教師陣の中に何故か幼い子供がいたが、誰かの子供が迷子になったのだらうと、葉月はいちいち気にしたりもせず、視線を本

へと戻した。しかし、

(ん？ なんだ？)

視線を感じ、本を静かに閉じる。どこからか目だけを動かし、すぐに見つける。右方向、やや遠めの座席に座る少年を見た。

このホールに生徒は中等部の一年生しかいないから、同い年なのだろうが、それにしても背が高い。おそらく160台後半位だと思う。瞳は氷のような水色をしていて、長めの浅葱色の髪は、右目隠し、もみ上げ部分は胸辺りまで伸びている。

葉月が言えることではないが、服装もやや変わっていて、エナメルで出来た黒のジャケットと、同じ色のサイズがピタシな黒のズボンを履いていた。ズボンを締めているベルトはかなり太い。全体的に見て、まるでこれからバイクにでも乗るような格好だ。

(っ……何だ、アイツ？)

その少年と目があつた瞬間、体が潰されてしまいそんな程重い空気が、葉月を包んだ。

おかしい。葉月はあの少年を見ているだけだ。それだけなのに、空気が重い。氷のような少年の目が葉月の体を凍らせる。目を逸らそうとするが、あの少年の氷の目はそれすら許さない。

決して、あの少年が殺気立てた目でこちらを見ているわけではない。そして、他の生徒にそんなプレッシャーは与えられていない。葉月があの子を見れば、勝手にそう感じているだけだ。それは、説明するならば、「なぜこんなものが存在するんだ」というような、圧倒感と違和感だった。

『では、これより、魔法名授与を開始します！』

魔術的通信法での教師の声が葉月の鼓膜を叩き、同時に嫌に重い緊張を途切らせた。正直、心底感謝した。やっと解放された気分になった。

精神を見えない鎖で縛られていたかのように固まっていた体の力が一気に抜ける。それと同時に、葉月はあの少年を視界から省き、ステージのほうを見た。

（それにしても、アイツ……………なんなんだ？）

葉月は体を俯かせて悩んだ。心底訳の解らないあの少年は一体……………。すると、愛海が心配そうに俯いた葉月の顔を覗き込んできた。

「どうしたの、葉月？ 具合悪いの？」

「え？ いや、アイツ……………」

葉月はさっき少年の事を言おうと思ったが、止める事にした。言いたくない。言ったら愛海は葉月をどこまでも心配する。本人には言わないが、葉月は愛海にあまり心配かけたくないのだ。そもそも、葉月は悩み事などを相手に直接言う人間ではないし、言ったことも無い。なのに、姉という、ある意味最も身近な存在に、こんなことを言うのは、葉月に出来るはずがなかった。

「いや、なんでもない……………」

頭の上に疑問符を浮かせながら「そう？ なら良いけど……………」と言って首を傾げるが、すぐに明るい表情へと戻る。

誤魔化せきれただろうかと不安になるが、鈍感な愛海のことだ、誤魔化せたに決まっている。それにしても表情と気持ちの切り替えの速いやつだ。この切り替えの早さは、葉月も姉の数少ない長

所として認めていた。

「いよいよ魔法名もらえるね！」

「え？ ああ、そうだな……」

その言葉に反応してやつと葉月が顔を上げた。 あの沈黙の中、
そんなに時間が経っていたとは思わなかった。

「それでは校長先生……」

校長先生と言われ、ステージの前へと出た人物は驚いたことに、
先程まで、迷子のように教師陣に紛れ込んでいた、葉月よりも幼い
子供だった。

黒い髪は爆発したようにぼさぼさで、その可愛らしい顔も寝ぼけていた。
服装もパジャマのみで、どう見てもただの寝起きの子供
（自分も十分すぎるほど子供だが）としか言えなかった。

「ども〜！ この魔法学園の現校長、白木葉しぎみづで〜っす、では……」

妙に高いテンションの挨拶が始まり、校長はその言葉と同時に、
親指を人差し指で抑えた状態で自分の額に持っていく。そして、

「早速、始めようか」

その親指で自分の額を弾いた。

その刹那、葉月の視界が闇一色に染まった。

第一：幕開けにケルベロス！！？ part 2（後書き）

はい！第一話、第二部の公開です！

本当に遅くて申し訳ないと思います。何とかしよう努力はしてるのですが……すいません。

え、今回の変更点ですが、まず一つ

生徒手帳がデジタル化したことですねw生徒手帳の存在は前のやつ
の5話で吉良が出ていますが、これは今で普通に使っている紙の
奴です。

しかし、今回登場したのは本当にデジタルwまなびス。レートに出
てきた奴を想像していただければこれ幸いです（解ってくださいれば
w）

そしてもう一つは、なんと、あいつの髪の色を変更！

金髪の少年としてのあいつでしたが、今回は浅葱色へと変更。これ
に関しては色々理由があるのですが、それに関しては後にw

このくらいでしょうか？

一応一話はあと二回で終わらせるつもりです。

毎度の事ながらのスローペースですが、きながに暇な時にこちらに
振り向いてくだされば嬉しいですw

では、今回はこの辺で、

皆様の、感想、評価、アドバイスを、心からお待ちしております！

第一：幕開けにケルベロス！！？ part 3

（……なんだ？ 景色が変わった？）

急な異常事態に、混乱しかけ、周りに誰かいないかと、辺りを見回しながらとりあえず愛海の名前を呼んでみるが、返事は無い。

この闇の世界には、自分以外誰もいないのだろうか。葉月は辺りを見回すが、やはり誰もいない。さらに言えば、何も無い。ただただ永遠と続いている暗闇の世界。

そして、たった今気付いた。体が浮いている。いや、浮いているというよりも、感覚としては水の中にいる感じに近い。

（あの子供……。ほんとに何者なんだ？）

あの子供、どれだけ譲歩したとしても、歳は10もいかないだろう。なのにこの魔法。そもそも魔法は飲酒や喫煙などと似たように、12歳になるまで使用は禁じられているはずだ。まあ、そもそも魔法名がないと使えないのだが。しかし、あの子供は使用できた。つまり、魔法名があるということになる。この矛盾は一体……。

そこまで考えるとのとはぼ同時に、葉月の目の前に光が出現し、その中からさっきのパジャマ姿の子供。もとい、校長『白木葉』が、少し不機嫌そうに頬を膨らませたまま現れた。

「子供とは失礼なんじゃない？ 僕はこう見えても66歳だよ！」
（なっ！？）

ありえない返答が帰ってきて葉月は驚愕した。この校長の歳の

ことでじゃない。『何も言っていないはずなのに返答された』事について驚いたのだ。

「あんた……何をした？　ここは何処だ！？」

葉は葉月なりの心からの訴えを聞くと、心底満足した様子ないやらしい笑みを浮かべる。それすらもどこか愛らしく感じるが、非常にむしゃくしゃした。

「知りたい？　はは、いいよ、教えてあげる。　君は…… 1 - C 組、出席番号 14 番、篠原葉月君だよな？」

この質問に、葉月は言葉にして返す必要は無いと思ったので、軽く首を縦に振った。その様子を見て校長は満足そうにさらに笑む。

「この闇の中は僕が生徒一人一人と話するために作った『心理鏡』っていう『思想空間』だよ。　つまり僕の思ったとおりになる世界だね。　ちなみに、『生徒は皆ここに居る』よ」

そんな馬鹿な、と思い、葉月は周りを見回してみる。　しかし先ほどと結果は同じ。　誰も居ない。　やはりこの二人以外には、誰もいない。

「下手な嘘付くな。　他の生徒をどこにやったんだよ！　……まさか、逆に僕だけを連れて来たのか？」

「あつはは、そんな怖い顔しないでよ、　そうだな……説明するなら、大きなホテルの中に一人一人が別々の部屋に僕と一緒に泊まっていると考えればいい。　同じところでも『部屋』は存在するからね」

葉が楽しそうな、明るい口調でそう説明する。そこで葉月はすぐに気付いた。

「……てことはじゃあ、アンタまさか、聖徳太子よろしく、『30人近くいる生徒と同時に話している』のか？」

「おお！ よく理解したね！ 察しが良い……。その通り、僕はきみ以外の286人と話している。他にも気付き始めた子が何人かいるけど、一番は君だったよ」

校長がまた随分と楽しそうな顔をする。葉月はそろそろ一発殴っても良い頃だろうかと思ったが、何とか押しとどめた。

「さて、そろそろ……君の魔法名だけど……」

葉は、そう言いかけて葉月の額にいきなり、だけど優しく自分の額を付けた。その速度はスローモーションのように遅かったが、葉月にどうさせることも、どう考えさせることもさせなかった。

彼の額の熱が葉月の額に伝わる。まるで親が子供の熱を測るみたいだ。

「君の魔法名は……うん、これがいい」

その瞬間、何かが葉月の頭の中を刺激した。何かが流れ込んでくる。それは名前。魔法名だ。

最初に、『T』。その次に『E』。『M』、『P』、『E』、『S』、『T』、『E』、『R』。その一文字一文字を頭の中でくつつけてみる。

(『TEMPESTER』……騒がせる者……？)

「そう、君の魔法名、『TEMPESTER』。君はきつと何か

を起す。 だから、この名前を送るん——っ！！？」

いきなり葉が笑顔から驚きの表情を浮かべたと思ったら、彼の体が消え失せ、同時に視界の闇も消え、目の前が大きなホールの中に戻った。そして、そこは異常な光景だった。

辺りを見てみると、生徒達が悲鳴を上げて、席から立って逃げたり、その場にうずくまって怯えている姿が見える。

（いったい、何が起こっている……？）

それぞれの慌て方はもろもろだが、彼らの視線は同じものへと向いていた。 葉月はそんな彼らの視線の先を見る。

そこに居るのは『ありえないが、ありえる生物』。

犬の様に見えるが、絶対にそれは無い。 頭は三つあり、体は立たなくても大人以上の大きさはある。 犬ではないとしたら、もう答えは一つしかない。 合成獣^{キメラ}。

複数の生物を一つに纏めた結果、絶大的な力を持つようになったという、正式名称、『魔力構成式新型人工生物』。 しかも、必要以上に魔力を練りこんで構成されたく、通常^{おてほん}の物と比べ、凄まじい力を持っているようだ。

今の葉月にはそれが解る。 何故そんなことが解るのかというと、魔法名は個人個人の魔力を察知するためのリーダーにもなるからだ。 目には見えないが、肌で感じられる魔力が、魔力で構成された合成獣の強さを表している。

教師達があの合成獣を捕獲、しかし、生徒には当たらないようにと出来るだけ威力の低い魔法を放っているが、うろたえている生徒

達のせいで上手く放てず、放てたとしても、合成獣には当たらず、まったく役に立たない。それは校長の葉ですら同じだった。この状況下では、誰であろうがこうなってしまうのは当然だろう。

だったら誰があキメラの合成獣を止める？ 魔力は当然、力も人間より遥かに強い。そんな相手に、勝てる確率はあるか？ この場の全員を守る手段はあるか？ 答えは、

（あるね）

こんなにも騒々しい中、そういう答えが出せるほど葉月は冷静でいられた。自身の中で何かが弾け、身体の熱が一瞬にして失せ、すべての感情が無と化した。

怖いとか、恐ろしいとか、反対に楽しいとか、面白いなんて今の葉月の心には無い。微塵もだ。ただ、ただ近づくだけ。時計の長針が短針を追う様に、無心のまま一定のリズムで目標へ向かって歩く。

そんな葉月を誰も止めない。止めようもしない。止められない。止めたくない。止めてはならない。

生徒達も教師達も葉も気づいている。葉月の力に。葉月の魔力に。葉月がまたさらにもう一步踏み出す。その行動だけでホール全体の空気が凍った。

そんな絶対零度の空気を断ち切るように合成獣が人間ではメガホンを使っても出せないほど大きく吼えた。三つの口から出る咆哮が葉月の髪を揺らす。しかし、その程度でこの寒冷された空気が元に戻ることは無い。

揺らされる髪下から覗く赤い目ブラッドアイが合成獣の姿を写した。瞬間。

「何処を見ている？」

何時、どう移動したのか、葉月の姿は合成獣の目の前ではなく真

後ろ、つまりこのホールの出口にあった。

「こつちだ、木偶」

獣はその巨体振りを思わせないような俊敏さで後ろへ振り向くと、その少年が、口調は冷静に、しかし完全なる挑発を、合成獣にした。合成獣の知能はそこらへんの動物よりも高いが、さすがに言語を理解するような脳は持ち合わせていない。しかし、今の葉月の言葉を挑発と受け止めたのか、グルル……。と三つの頭のそれぞれの口から低い声を呻らせている。

「さあ、来い」

葉月がロングコートを翻して走り出し、ホールの出口を抜ける。それを、まるで逃げる脱兎を追いかけける獣王が如く、合成獣も、ドン！ という凄まじいスタートダッシュをして追いかけていった。

第一：幕開けにケルベロス！！？ part 3（後書き）

こんばんわ〜久澄望です！

今回は少しだけ、早く出来ましたかね？そう思えてもらえたら幸いですw

今回の変更点ですが、葉の年齢ですね。前回より10歳ほど歳を上げました。これもちよつとした物語変更が理由ですw

もう一つは、まあ、葉月の行動ですね。前から思っていたことですが、この場で戦闘したばあい、少々の地の事情が色々と……になつてしまうので、変更いたしましたw

今回はこんなところですよ。さて、一応次で1話は終わらせる予定なのですが、なんか追加しそうで自分でもちよつと不明ですよw
まあ、頑張りますw

では、今回はこの辺で。

皆様の、感想、評価、アドバイスをお待ちしております！

第一：幕開けにケルベロス！！？ part 4

「……………」

それまでの光景を、誰もが見つめているしか出来なかった。如月学園校長、白木葉^{しろきよう}も、そうするしか出来なかった人間の一人だ。そしてたつぷり数秒掛けて、何名かが弾かれたようにハツとする。それにも白木葉が含まれていた。

「あの、バカ……っ！」

あの青紫色の髪の少年の行動を思い返して、悪態をつく。あの少年、篠原葉月だったか。

あの合成獣からこのホールの人間を守るためにという意味の行動なのかもしれないが、注意を自分に向けるというやりかたは、理由がどうこう関係なく愚か過ぎる。

いやそれ以前に、入学したての子供に何が出来るというのだ。魔術なんて使用できないし、出来たとしても簡易なものだ。そんなの、あの合成獣を倒すどころか、足止めにもならないだろう。まさか喧嘩に自信があるからという理由であのような行動に出たのではないだろうか。

「早速騒がせてくれちゃって……！」
「校長！」

苛立つて、といよりは笑いをこらえるような齒噛みする葉の横から、分厚い眼鏡をかけた若い女教師がやや怯えた様子で声をかけて

くる。

「さっきの子は僕が何とかする。 君たちはこのホール内の生徒を
落ち着かせて」

「は、はっ、はいっ！」

この女教師、たしか今年からの新任だったと思う。 そのせいか、
女教師の返事はやや裏返っていた。 しかし、それでもこの学園の
教師を勤める（ことになった）エリート。 迅速に、的確に他の教
師に指示を出して場の混乱を収め始める。

葉はそれを長い間見ることはしなかった。 それは、自分には自
分のやることがあると発言したこともあるが、もう一つ。 この学
園の教師なら、このくらいのことは当然のように出来ると確信して
いるからでもあった。

「さ……て……」

のんびりとした仕草で伸びをし、首を左右の順に傾けてポキリポ
キリと小気味良い音を鳴らす。 そうしながら、彼は考えてみる。

（あの合成獣…… 論文を作るためとかの実験用とかじゃなくて、護
衛とか強襲とかに使う戦闘用として作られていた……。 一体誰が
あんなのを作ったんだか……。 いやまあ、作ってもいいけど、キメラ
っていろいろ危険だから、うちでは記録とつてるはずだけど……。 あ
んなのうちで作られた記録はないし、僕自身も作った記憶もないし
……。 となると自然的に、学園の外か、または誰かが内密に作って、
放ったってことになるけど……。 いや、今はそれよりもあの子達を追
うのが先だね）

とりあえず、まだそう遠くへ行っていないはずだ。 少なくとも、

地上には出ていないだろう。

（じゃあ、こうした方が良いね）

グッ……と一瞬だけ脚に体重を掛けて、次の瞬間、ドン！というロケットスタートというのを絵に描いたようなスピード、しかもたった一歩でこのホールを出る。

その時に起きた風圧が後ろの生徒たちを驚かせたが、今はどうでもいい。今は篠原葉月だ。しかし、こちらはすぐに片がつく。場所はもう解っている。

葉はホールを出た瞬間、すぐさま左方向へと一歩進む。一歩といてもさつきと同じ方法でだ。たった一歩で20メートルは跳んでいる。十字路に入った。次は右にまた一歩、ほぼ同じ距離を跳ぶ。そして

「いた！」

左方向、およそ70メートル先に、あの合成獣の尻尾が見えた。あそこは、地上―正確には第四職員校舎へと続く階段があったはず。

地下道は田んぼの田の字を20メートル間隔にいくつも繋げたような構造になっていて、広さも長さも均一だ。しかし、階段は違う。通路が4メートル程度あるのに対し、地上へ続く階段はまばらであり、しかも職員校舎への階段は人間二人が並んで歩ける程度の幅しかない。そう、合成獣にとって、その幅は狭すぎるのだ。

おそらくあの篠原葉月は階段の途中にいて、合成獣はそこを通れずに、呻りながら小さな隙間にあるエサを取ろうとする犬のように腕を伸ばしているのだろう。

（へえ……やっぱり頭良いね、あの子……）

心の中でそう感心しつつ、もう一度一步だけ跳ぶ。　今までよりも大きく、およそ70メートルを一瞬で。　そして合成獣と葉月の付近で足が地面についたとき、なにかが聞こえた。　これは……

（え……うそ、詠唱……？）

「大地よ怒れ。　姿は龍頭。　数は一。　対象を食らえ……」

それはまるで、眠れない子を寝付かせる優しくして静かな子守唄の様だった。　しかしその『唄』が終わる瞬間。　葉月に襲い掛かるうとしていた合成獣が地面から出現した何かに捕まった。　というよりも、『噛まれた』、または『喰われた』と表現したほうが正しい。

合成獣を喰らったそれは、まるで巨大な龍の頭だった。　恐らくコンクリで出来ているそれが、天井を向きながら合成獣の体を咥えている。　その光景は一つの絵のようにも見えた。　噛まれた合成獣の鮮血が飛び散り、床や壁や天井や葉の服や肌を汚す。

「……………」

目の前の光景に葉は驚きを隠せず、啞然とするしかなかった。

その原因は簡単。　今葉月が発動させた魔術に対してだ。　さらに言えば、今日、ついさっき魔法名を貰ったばかりである葉月が今の魔術を使ったという矛盾に対してだ。

簡単な魔術だったら、さっき本を見たから、ぶつつけ本番でやってみたといえ、一応の説明はつく。　しかし、上級魔法は別だ。　中等部では中級魔法が最後。　高等部の半ばでやっと教わるものだ。　しかも、習得もかなり難しいのだ。　それに今のは、

（……最上級の『遠隔型魔法』……………？　……………そんなの、LEV

LEVEL7やLEVEL8の術式なのに……………)

魔法使いにはレベルという物がある。しかし、レベルとはあくまで良い言い方。嫌な言い方をすれば地位だ。最大LEVEL10まであり、数が多ければ多いほど、『地位』が高い。

LEVEL1、LEVEL2、LEVEL3、LEVEL4、LEVEL5、LEVEL6、ここまですべて生徒レベルだ。実際、LEVEL6に到達する生徒は稀で、基本的にはLEVEL4止まりが多い。逆にLEVEL1止まりという生徒も珍しくはない。

そのまた逆に、LEVEL6を限界とせず、そのまま突き進んで成長したのが教師レベルだ。LEVEL7、LEVEL8。これは本当に稀で、天才の中でも一部としか言えないほどのレベルであり、人間の限界点と言われている。

では、残りの二つは何だと言われたら簡単だ。『人間ではありえないレベル』と考えれば、9割強正解だ。LEVEL9、LEVEL10。

葉月はこの二つにもっとも近いLEVEL7やLEVEL8並の力を発揮した。入学したての生徒どころか、生徒である時点で、今の魔術を発動するのは非常に難しい。

だからこそ葉は気付いた。『力を使いすぎた今の葉月に意識が無い』と。それがわかったと同時に、葉月がぐらりと横に倒れた。

「おっと！」

しかし、彼の体が床につく前に一瞬で移動し、葉は葉月の体を支えた。彼のほうが体は小さいが、彼はまったく重さを感じていないような表情で彼の体を支えられている。

葉はそのまま、気絶している葉月の腹部に手をやった。

(……………一応無事だね……………。疲れただけか……………ッ！)

一瞬だけホツとして、しかしすぐに一つの気配に気付く。その方向を振り向いた時、少し強いが速い足音がここから遠ざかっていく。

もしかしたらこの合成獣を作った本人かと思い、体を強張らせたが、すぐさまそれを解く。その可能性は無いと判断したのだ。

今少々離れていたにしても、彼の魔力を察知する能力は、そこら辺の教師ですら上回る。

今感じた魔力はハンブルLEVEL1。つまり、考えるまでも無く生徒、それも入学生だ。おそらく、あの騒ぎの中、この篠原葉月のことが気になって来たのだろう。

（まあ…… たった一人の生徒に見られても問題は無いよね……）

合成獣の死体があるのが問題だが、自分もいるのだ。きっと、自分が仕留めたのだと思ってくれるだろう。それに、そんなことよりも、この少年だ。

（体内、及び体外に以上は無かった……彼の魔力も、普通の生徒よりは強いけど、それでもコモンLEVEL3ギリギリ。……だとしたら、『かくせいしゅ覚醒種』かな……？ だけど今のは少し違うような……）

さっきまでの事態をそう推理してみる。すると自然に顔の筋肉が緩み、口の両端が吊り上った。

（ふふ…… さつそく、騒がせてくれたね『TEMPESTER』……。それにしても……）

葉は横たわっている合成獣を見据える。既に死んでいる。当然といえば当然だが、事態が事態だ。どう考えたって目の前の光

景の矛盾は取り消せない。

（それに、この合成獣……論文を作るためとかの実験用じゃなくて、護衛とか強襲に使う戦闘用として作られていた………）

合成獣の周りには素材であつたコンクリートの塊が散らばっている。葉月によって作り出された龍頭の形を保つための魔力が尽きたのだろう。そしてゆっくりと葉月を見据える。すると、ゆっくりと葉の口の両端が吊り上り、その愛らしい顔に似合わない妖艶な笑みが出来上がった。

何かを企んでいる様な笑みだが、よく見ると全然違う。彼の笑みは『何かを企んでいる誰かの行動が楽しみだ』という笑みだ。何が始まるのか解らない今、こちらは何をするのか決められない。だからこそ面白い。

（ふふっ……。長生きすると面白いものが見つかる。忙しくなりそうだ）

葉は獅子よりも強い声を出して笑う。だが強いと言っても、声の大きさそのものは半径一メートル前後にまで近づかないと聞えないほど小さい。

しかしそれは、そのくらい近づいてしまえば、心臓の弱いものなら一瞬で気絶してしまいそうな悪魔のような笑みだった。

第一：幕開けにケルベロス！！？ part 4（後書き）

え、今回も随分と長い時間を使っしまいました。本当に申し訳ございません。

やはり最初の最後ということで、後のことも考えた結果……にして
も遅すぎますね、本当に申し訳ございません！

こんなに間がたつていながらも、読んでくださっている人がいると
いうのが嬉しいと同時に本当に自分が情けないです；

次の更新は早めです！今度は嘘ではありません！はい！

えっと、では、今回の変更点ですが。

まあ、色々違いますねw

あれ、金髪の少年が浅葱色の少年に変更したことは……前回言った
かw

えっとそうですね、単純に言っちゃえば、葉月が始めて魔法を出し
た場所が変わりましたw

前回はホールの中でしたが、今回は人での少ない場所になりました
ねw

だって、あんなたくさん人の目がある場所じゃごまかしきれんだろ
うにwまあ、今回もある程度噂が立つんじゃない？程度にはしました
がw

もうひとつは、LEVEL10の名前が変わりました！前はゼウ

スだったのですが、固有名詞を使うのはどうかと思ったので、『神のみぞ知る』という名前になりましたw

多分こんなところかな？

ああ、あと、最後のほうに出てきた。生徒。アレは……誰でしょうねW H A H A

では、今回はこの辺で。

皆様の感想、評価、アドバイスを心からお待ちしております！
久澄望でした！失礼します！

第二：浅葱色の少年 part 1

2067年4月10日

冷たい水で顔を洗うと表情がひきしまる。普通はそうだが、意外とそれは個人さがある。と、少年、篠原葉月は思っている。そう思っている本人はたった今顔を洗ったばかりなのだが……どうも引き締まらない。今もどこか眠たそうな表情だ。

「……はあ……」

その表情を見た少年は嫌気がさしたようなため息をつく。いや、正確には表情ではなく、自分の顔だ。もっと正確に言えば、自分の双眸と髪だ。

ブルーベリーのような青紫色の髪と、炎……というよりは、鮮血のような深みのある赤色の瞳。

もともと、この少年の髪と目は最初からこのような色だったわけではない。しかし、染めたとか色を抜いたとか、カラーコンタクトをつけているとかでもなかった。

そう、これらは、『魔力式色素異常症候群（通称：C O C S）』によるもの。

葉月の髪と目は、魔力によって変色する時期が遅かったため、彼は自分の元の髪と目の色を知っている。だから、この髪と目の色が、これらを持っている自分が自分じゃないみたいで嫌いだった。

特に『この目』。真^{まっか}つ赤^{まっか}で真^{まっか}つ紅^{まっか}の真^{まっか}つ暁な目。

見た瞬間で人の血を連想させられるほどこの赤が澄んでいて、見るだけで吐き気がするようだった。

（まあ、一応もう慣れたけど……そういえば、何故魔力によって人間の色素、それも、髪や目の色素のみに異常が出るのか、いまだに解明できていないんだっけね……………ふん）

どこことなく感じた苛立ちを、かすかに鼻を鳴らすことで過ごし、リビングへと戻る。

リビングは、当然の如く廊下と同じフローリングの床。横長で、学生寮にしてはやや広いつくりとなっている。

（それにしても……………）

昨日のこと。

入学式の途中、正確には魔法名をもらった後、会場に突如現われた合成獣を目にしてからの記憶が、なぜかない。気を失っていたと予測していいだろう。

その後、目が覚めたときは変に白い天井が真っ先に目が入った。次に鼻につく薬の臭い。体を服越しに包む薄い掛け布団といやに硬いベッド。プラス、体に痛みは無かったが、異常なほどの疲労感と脱力感が、しばらくの間、葉月をベッドに拘束していた。

保健室での出来事も、何かあった気はするが、それも朦朧としていてハッキリとはしない。だが、確かあのときに校長が来て、

「今回は、僕の変わりに合成獣^{キメラ}を止めてくれてありがとうね。ちよっと大事になったみたいだけど、まあ教師以外の生徒のほとんどは『ホール内の教師の誰かがやった』って思ってるだろうから、そんな大きな噂ことにはならないと思うよ。君も含め、皆もらったばかりの魔力と魔法名が体になじんでないだろうからね。ああでも、さすがにあの合成獣を引きつけるって言う行動は目立ったから、ある程度の質問攻めは覚悟しておいたほうがいいよ。そりゃ

もう、馬鹿で無策で勇氣ある行動だったからね。……まあ、それは置いておいて……そんな頑張った君には面白い物をプレゼントあげちゃおう！ 遠慮なく受け取ってね。返品はダ・メ・だ・ゾ」

とか何とか言っていた気がするが……と、廊下とリビングの境界線の働きを持つドアを開け、ため息をつく。

この学園では男子寮、女子寮というものは無く、寮内でバラバラに男女別に分かれている。これに対して、別にこれといった反論は無い。例え同じ遼に女子がいたとしても、葉月は女子に興味がない（無論男にもないが）。

一人一部屋じゃなくて、二人一部屋というのも、全然我慢できる。面倒くさいところもあるだろうが、実質的には楽しいと思うからだが、目の前の悪夢はどうしても我慢が出来なかった。文字通り、夢であるなら。マジで覚めてくれと思うほど、本気で疑問と怒りを抱いてしまう。

『何故女子であるはずの愛海がこの部屋にいるんだ？』と。

あの時の校長の……葉の『面白いプレゼント』というのはこのことだった。いくら『面白いプレゼント』とはいえ、これはさすがに面白すぎじゃだろうか。暗殺の計画を立てたいくらいに。

というか本来なら、葉月と共にこの遼で学園生活をすごすはずだったルームメイト（名前……なんだったっけか……）は、たったこれだけのために他の部屋へ、葉月とは違うルームメイトと共に学園生活を過ごすこととなったと言うのか。酷いと言うかなんと言うか……。

とりあえず、そんな気持ちなどを誤魔化すために、というか本当

に夢でありますようにと願って、先ほど顔を洗っていたのが……どうやら現実らしい。

時刻は午前十時二十二分。本来は中学校舎にいるはずなのだが、今年入学した生徒は、この馬鹿広い学園の中を知るために、入学式後の二日間は休日となっている。今思うと、休日が嫌な日だと思っただのはこれが初めてかもしれない。

いやそんなことよりも、どうにかしてこの姉を追い出せないかと考えてみるが、そんな不可能を可能に変える様な便利な魔法など無いと、すぐに諦めた。

それで、無自覚な事の発端の一つである、愛海は、葉月が寮に着たらじつくりと楽しもうと思っていた最新型家庭用ゲーム機「ゲームステーション4」で格闘ゲームを勝手にやっている。

先程愛海が、一緒にやろうよと誘ってきたが、丁重に（嘘だが）断らせていただいた。理由は、愛海の格ゲーでの実力が、魔力のレベルで言うゴッドノウスLEVEL10的に強いからだ。

出来れば思い出したくないが、随分前それが原因で泣かされた思い出もあるし、小学校5年生の頃、始めてやるタイプの格ゲーを1ゲームで攻略し、そのあと行われた同じ格ゲーの大会でストレート及びノーダメージで優勝したことという歴史を葉月は覚えている。

（人間一つは取り柄があるって言うけど、それがゲームっていうのはどうかと思う……）

まあ、そういう理由も含め、寮の内での行動手段がなくなったので、どうしますかと心の中で自問してみると、外に出て学園見学をするという手段を心の中で自答した。

「愛海。 僕校内見て回るけど、良い？」

いつもなら勝手に行動するのだが、寮の中に二人だと、何となく

許可を取った方がいい気がした（まあ、取れなくても出て行くつもりだったが）。

「え？ あ、ちょっと待って！ 私も行く！」

「は？ 何言ってるの？ 今そ」

『ウボアー！！』

「れやってってはや！？。 上級者用のザコキャラ使っというて瞬殺だと！！？」

「さ、行こう！ 行きたい所があるんだ」
「……………」

唖然とする葉月の腕を半ば無理やり引っ張り、部屋を出て、エレベータを使って一番下まで降り、そのまま寮を出た。

何となくだけど、寮を出たときの風景がどうも住宅街に見える。

昨日の帰りの時も同じ感想を抱いていたが、今もそう思える。

葉月たちの寮の両隣に同じ学年の寮が幾つも並んでいるからだろうか。

この学園は普段の生活環境と似させるために、学園内は街を模したような造りとなっていると聞いた。バチカン市国の4倍を超える面積を持つこの学園を良い方向に活用したやり方だと思える。

この案もやはりあのバカ校長が考えたらしい。まあ、バカなりに良い考えだとは思うが、そう考えると何となく眉間に皺が寄ってしまう。

「で、何所行きたいの？」

「決まってるじゃん」と・う・ぎ・じょ・う」

闘技場というのは、その名前の通り、この学園内の魔法使い同士が、学年関係無く、魔法で闘いあえる場所だ。

基本的にそこは、休み時間とかに生徒同士が覚えただけの魔法

を試して戦ったり、実習で魔術の訓練をしたり、試験で生徒一人一人が現在どの程度の実力があるかを調べるために使われている。

「何でそんなところに？」

「面白そうだから。ほかに理由いる？」

「いや……別に」

「じゃ、ホラ！ そんな私をひくような目で見てないで、行こ」

再度無理やり引っ張られ、葉月は振り解こうと思ったが、情け無いことに愛海の腕力によって、それすらも適わなかった。

第二：浅葱色の少年 part 1（後書き）

皆様お久しぶりです！

まあ、前回言ったとおり、いつもよりは早い更新でしたが、結果的には、今回も遅い更新となりましたwホンマにスイマセンw

さて、今回の変更点ですが……………

サブタイが変わった以外特にはないですねwまあ少し文章が増えた程度でしょうかw

あとは、『魔力式色素異常症候群』のことを書いたくらいですねw
1話の最初に説明を書いたので、特になにかしたってものはありませんが；w

さて、ちょっと短いですが、今回はこの辺でw

皆様の感想、評価、アドバイスを心からお待ちしております。

それでは、失礼します！

第二：浅葱色の少年 part 2

スクールバスを使い、十数分かけて着いたのは、第一繁華街地区を抜けたところにある非常に大きなホール。見た目の形的にはよくあるかまぼこ型の体育館に近い。

中に入ると、そこはやはり広い空間だった。高さはおよそ8メートル。横と縦はそれぞれ40メートルと60メートルとあった所だろうか。そしてこの建物の中央に広く、まるでコロシムのように、ギャラリィのおよそ3メートル位下の横30メートル、縦40メートル程度の空間に、生徒が二人居る。

二人のうち一人は、おそらく高等部の男子生徒だ。この学園は私服製なので、判断し辛いが、とりあえず顔と雰囲気ですう判断した。体中傷だらけで、そうとう辛そうな表情をして肩で息をしている。

そんな生徒を見下すように見ているもう一人の生徒は、

「あいつ……！」

葉月はもう一人の生徒に見覚えがあった。入学式の時に目が合った浅葱色の髪の生徒だ。忘れるわけが無い。というよりも、頭が忘れてくれない。

絶対零度を感じさせる氷のような青白い左目と、彼の浅葱色の髪に隠れた右目。始業式の時と同じ、今すぐバイクにでも乗るような格好。

そいつが、肩で息をしている相手に向かって、完全に見下したような目をしながら口を開いた。

「弱いな……。つまらない……」

まるで機械のように中身が欠けた口調でそう言つと、いきなり浅葱色の少年の姿が消えた。誰もがそう思った瞬間、上級生の後ろに風が唸り、同時に浅葱色の少年が姿を現す。

「っっっ！！！！？」

闘技場の内にいる全員が彼に気付いた時、上級生は何も出来ずに彼に蹴り飛ばされていた。上級生の体が鈍い音を立て、サッカーボールのように飛びながら、二回バウンドして壁に当たる。

『強化魔法』だと、葉月は推測した。強化魔法というのは、大気中の元素を対象にせず、自分の体の元素を操る魔法のことだ。体の元素の位置や構造を組み変えることで、ものによっては通常の人間の倍以上に身体能力を上げることが出来る。

普通は中等部一年の最後のほうでちよつと腕力が上がるだけのやつを習うのだが、彼は自己流で習得したらしい。かなりの才能の持ち主だと葉月は思った。距離があるうえ、ギャラリーのせいで彼から感じられる魔力の強さは解らないが、葉月と同じ^{コエ}LEVEL 3くらいだと思う。

(入学したての一年がLEVEL 3つてだけでも凄い話だけど……)

逆に、あの上級生はおそらくLEVEL 4か5位。こちらは周りのギャラリーと比べてもレベルが高いのでギリギリで感じ取れる。相当の実力者だ。いくら彼がすごくてもこのLEVELの差と経験は埋められない。それが普通なのだが、今はどう見たってあの浅葱色の少年の方が優勢だ。

上級生が呻き声を上げながらゆっくりと立ち上がる。身体のダメージが大きいのか、疲労が溜まっているのかは解らないが、肩で息をしている。立っているのも辛そうだ。

「ふざけんなよ……俺が、入学したばかりの一年坊なんかに負けられるかよ!!」

彼がそう咆哮し、両掌を浅葱色の少年に向ける。

「風よ研ぎ澄ませ。 姿は刃。 数は八。 前方の対象を切り裂け」

すると、辺りの風が上級生に集中し、彼の両腕に肉眼で感知できるほどのそれが纏った。 あれは高い魔力で高密度に構成されている証拠。 やはり実力自体はかなりの物のようだ。

「おい、一年。 傷だらけになりたくなけりや降参しな」

上級生が嫌らしい表情をして浅葱色の少年に言い放った。 なんとまあ、この御時世に三下の言うようなセリフを吐けたなど、葉月は思った。 言ったらなんかこちらまで敵視されそうなので口にはしないが。

浅葱色の少年も葉月と同じことを思ったのか、小さくため息をついた。 諦めるとか、降参する気は無さそうだ。 上級生は彼の心境を読み取ったのか、眉間に皺が寄っている。

「我が脚よ駆ける。 速度は疾風。^{はやて} 我に降りかかる難から逃れろ」

浅葱色の少年は歌うように、だが速く口を動かした。 同時に上級生が風を纏った両腕を自分の体の前で交差させる。

「残念だよ一年坊! バラバラになりやがれ!」

上級生がまるでセーフをコールする野球の審判の様に両腕を振った。 同時に彼からものすごい突風が放たれ、それが、空間や床や

引き裂いていく。

愛海はワザとらしい悲鳴を上げて、しがみついていた。葉月はこれを見無視し、ずっと下を眺め続けている。

しかし、風の濃度が強すぎるせいで、彼の姿を見ることは出来なかった。何となく腹が立ち、小さく舌打ちをする。

（っ……あいつはどうなった……？）

数秒経ってやっと風が収まった時、闘技場内はボロボロだった。上級生の前方の壁や床に巨大な怪物が鋭い爪で引つ掻き回したような痕が付き、荒地のような状態になっていた。

ギャラリーの方は魔法で作られた特別な防壁があるので、下から来る攻撃は当たらないが、浅葱色の少年は無事ではないだろう。

（いた……！）

他の観客達よりも早く、浅葱色の少年の姿を葉月の赤い目は捉えた。

葉月の予想通り彼は無傷で、いまは上級生の真後ろにいる。おそらく、さっきの唱えた術も、『強化魔法』だったのだろう。

上級生が彼の気配を感じたのか、後ろを振り返るが、それと同時に彼は浅葱色の少年に顎を思いつき蹴り上げられる。体が本人の身長くらいまで浮いた。

そしてそれを追う様に跳んだ彼から顔面に跳び回し蹴りまともにくらい、聞くのが嫌になるくらい鈍い音を立てて、悲鳴すら上げずに、まるで水面に向かって投げた小石のように三、四回バウンドした後、数メートル転げまわった。

転がるスピードが次第に遅くなり、最終的には仰向けになって止まる。そのときの上級生の顔は、右頬がへこみ、目は焦点があつてなかった。どうやら完全に気絶したみたいだ。

「勝負あり……」

葉月がそう呟いた直後、ギャラリー内の観客から歓声が上がった。浅葱色の少年はその歓声に興味が沸かないのか、気絶している上級生を無視して踵を返し、上り階段のある入場へ口向かっていった。彼がギャラリーに姿を現すと、皆が彼に駆け寄って「すごいね」とか、「天才だよ君」とか言っていたが、それら全ても無視して、葉月の前へ歩み寄ってきた。

「っ！」

愛海が警戒したような顔をしながら葉月の肩を掴んで後ろに回った。もしかしたら、彼を恐れているのだろうか。無理もない。

葉月ですら似たようなものを感じていたのだから。

「葉月……もう他のところ行こう?」

耳元で葉月に小声でそう言う。やはり声音が怯えたようにやや震えている。

葉月はそんな愛海には何も言わず、代わりに彼女を落ち着かせるように、一度だけ肩に置かれた愛海の手を優しくそつと撫でた。

すると愛海の手は葉月の肩からゆっくりと離れていった。

後ろにいたので彼女の顔を見る事はできないが、きっと安心したような表情をしているのだろう。葉月は浅葱色の少年を見つめ直す。昨日と状況は違うが、彼の氷の目と、葉月の鮮血の目から発せられる「何か」が交じり合う錯覚を感じる。

不思議な感じがした。昨日と違って。コレといった恐怖を感じない。恐怖ではなく、こんな物が存在するのかという、驚愕だった。

それでもやはり、葉月はそれを表情には出さなかった。そんな葉月を見て浅葱色の少年は口を開く。

「……お前、名前は？」

「……篠原、葉月」

いきなり言われたので内心慌てたが、表面では落ち着いて答えた。

「「モ」LEVEL3か？」

「一応校長からはそう言われた」

「……」

「……」

ものの見事に会話終了。

まあ、元々話しがしたかった訳じゃないから別に良いが、こんなと何か空気が重い。そう感じていると、浅葱色の少年がポケットからメモとシャーペンを取り出し、何かを書き始めた。

数秒後、書いたそれを葉月に差し出してきた。受け取って見てみると、それにはアルファベットと数字の羅列が書かれてあった。

（……これって……）

少し間をおいて考えてみたが、やっぱりメルアドだ。どうしてコイツが自分なんかこんな物をよこすのだろうか。ていうか、持っているのか？ いやそれ以前に、話す相手がいるのか？

そういうことを思っていたら、いつの間にか彼は背中を向けて出口へ向かって歩いてしまっていた。

「あ……」

彼が出て行くまでを見送ると、葉月はあることに気付いた。

「名前聞きそびれた……」

我ながら随分と情けないと感じ、葉月はため息をはいて頭を掻く。そんな葉月の様子を見た愛海は何故か居心地悪そうな顔をしていた。

第二：浅葱色の少年 part 2（後書き）

今回もまた長くなってすいません……（本当に謝ってばかりだな俺w）

今回もこれといった変更点はございません。微妙に文章が変わったくらいですね。

あと、金髪の部分を浅葱色に変えたりとかwその程度ですw

正直、第二話にこれといった変更点はあまりないかもしれませんが最後の部分ちよつと加えるくらいかな？

では、少々短いですが、今回はこの辺で。

皆様の、感想、評価、アドバイスなどを心からお待ちしております！
久澄望でした！

第二：浅葱色の少年 part 3

その後、葉月と愛海は学園の様々なところを見回り続け、遼に戻ったのは午後4時ほどだった。

愛海に振り回され続けた葉月は、疲れた体をリビングのソファに沈め、一息ついてから浅葱色の少年に貰った紙をロングコートのポケットから出し、それを何分間以上睨みながら考えていた。

（なんて送ればいいんだ……？）

「こんにちわ」なんて送るのはどう考えてもおかしいし、ひどく坦々とした彼の性格を考えると、返事はこないと思った。

「好きなものは何？」なんて送ったら。「別に」という曖昧にも程がある答えが返ってきそうだ。「友達になろう」と言うのは何となく嫌だし、義理もない。また、「好きです」と言うのは論外ことこの上ない。

というか後ろの二つはまず思っててすらいない。ではどうするかと自分らしくないことを本気で考えてみる。

そもそも他人との会話すらあまり慣れていない彼は、一言で済マますことがいけないことに、まったく気付いていない。実は携帯電話は小学校の頃から持っていたというのに、アドレスも家族以外のものを手にするのはこれが始めてだったりする。

（そもそもアイツはなんで僕にこんなものを……？ 渡してきた時も、ぜひ連絡をしてくれて感じてでもなかったし……ほんとに何でだ……？）

そんな風に悩んでいる葉月を、愛海が頬を膨らませながらジトーとした目で見ていた。ああ、不機嫌だよこの人と適当に解釈す

る。　　そういえば闘技場にいたときも似たような顔をしていた。

「なにその顔、ブスになってるよ」

「女の子に向かってそういう言葉は禁句！」

愛海は自分が今まで座席として使っていた座布団を思いっきり投げてきた。　およそ120kは出していたであろうそれは、しかし、葉月の左手によっていとも簡単に受け止められる。

「ハイハイ……。それで、どうしたの？」

座布団を適当なところへ放り投げてから言うと言うと何故か愛海は口ごもり、モジモジしながら俯いた。

本当になんなんだと、葉月はイライラするが、とりあえず、待ってみる。　十数秒立ってやっと愛海の口が動いた。

「えっと、葉月は……。えっと……。その……………」

「？」

「……………さっきの子が気になるの？」

「……………」

葉月は返答に困った。　正直、気にならないといえば嘘になる。

あの少年の存在は葉月に恐怖という感覚を思い出させたのだから、愛海は怯えながら葉月を上目遣いで見つめている。　もしかしたら、あの少年のことが気になるのは愛海の方なのではないのだろうか？

あの時、愛海は怯えていた。　猛禽類ににらまれた小動物、蛇に睨まれた蛙という感覚というよりは、葉月と同様、信じがたいものを見てしまった子供のようだった。

愛海が一瞬だけ顔を上げてこちらを見た。　しかし、一瞬だけ驚

いた顔をしてすぐに俯いてしまう。葉月は、いつの間にか自分が彼女を睨んでいたことに気付いた。

葉月は眉間を軽く揉んで力を抜き、何か言いたそうな愛海の顔をじつと見る。愛海は俯きながら上目遣いで葉月を見て、指をモジモジと絡ませている。

「あのさ、どうしたの？」

愛海は、ひゃうつと変な悲鳴を出しながらは肩を震わせ、自分の頬を真っ赤に染めた。何かやり辛い……。

「あ、あ、あ、あの……私でよければ、メール作ってあげようか？」
「は？」

いきなり何を言い出すかと思いきや、愛海の言葉は嬉しいが、少し不安だった。

（相手は男だぞ？ ……あんまり当てに出来ないけど……）

しかし、自分がやろうとしても、どうしようかが解らないので、とりあえず愛海に携帯を渡してみた。随分と嬉しそうな顔をして受け取った愛海がやたらと楽しそうにメールの文章をうっている。何故だろう。こいつのこういう顔を見ると、なんだかすこしだけ、本当に少しだけだけど、心が落ち着く。

「できたよ」

「あ、うん……」

何故か少しだけ戸惑ってしまったのを、葉月は頭の中で後悔しながら携帯を受けとった。表情が緩んでいなかったか、しょうもな

い心配もしてしまう。

愛海に作ったメールの文章は『名前なんていうの？ さっき聞けなかったから、教えてくれない？ こんなこと言うのは嫌だけど、とりあえずよろしく』とかいてあった。

意外とまともに、おまけにどこことなく自分らしく作られたメールの文章を見て、葉月は失礼ながらも呆氣にとられる。

「ど、どうも……」

「うっん、いいの。 私がやりたかったただけだから」

何故かまた頬を紅潮させる愛海を見て、葉月は妙な気分になった。何故コイツは自分のことを思ってくれるのだろうか？

拒絶したこともあったし、大嫌いと思いつきり言い聞かせたこともあったのに、愛海はそれら全てを受け止め、ごめんねと自分から謝り、葉月の機嫌を取り戻す。

正直、自分に対してそんなことができる奴は、自分の知っている中ではコイツしかない。 ていうか、そんな変わり者、コイツ以外いるわけ無い。

そんな優しい心を持っている奴は、自分の知っている中では愛海しかない。 本当に何でだろう。 ほっといてくれていても、別に傷付かないのに。

そう思うと、余計に解らなくなった。 意図は読める。 自分に喜んで欲しいのだろうと。 でも何のために？ そんなことをして何の得になるのだろうか。 本当に解らなかった。

でも……… 少しだけ、少しだけけど、嬉しかった。

「愛海……」

「なに？」

名前を呼ぶのと同時に少しだけ自分の顔の筋肉が緩んでいたのが

わかると、一回だけ咳払いをし、表情を整えてから愛海を見た。少しだけ熱くなった頬が、緊張してぎこちない表情をしていると知らせている。口を開いた瞬間をが泳いでしまった事はもうどうしようもない。　　なんだか、顔を合わせることが難しく感じる。

「……ありがとう」

愛海は葉月の珍しい謝礼を聞くと同時に表情をばあっと明るくし、「うん！」と言って勢いよく抱きついてきた。自分の首下辺りに、妙にやわらかい物が当たり、さらに頭に頼ずりしてきたので拒絶反応が出かけたが、まあ今くらいは良いだろうと思いい、ソファに体を預けたまま、体の力を抜いて天井を見上げた。そして、誰にも悟られないように、小さく笑った。

愛海が作ったメールを送ってから約一時間がたった。右手首の腕時計を見ると、針は7時半を指していた。

葉月に夕食を作らせ、その7割強を食べた愛海は現在入浴中だ。そしてメールの返事は未だになし。　　やっぱり、よろしくってつけたのがいけなかったのだろうか。　　それとも名前を聞くことがまじったのだろうか。

そんなことを少し真剣に考えていると、不意に葉月の携帯が優しい音色の着信音を鳴らした。　　急いで携帯の画面を見るとメールが一件。　　チェックしてみると、やはりあの浅葱色の少年からだった。

「……………」

驚きのあまり言葉も出ず、固唾を呑み、何故か浮き出た額の汗を

軽く拭う。 携帯の決定ボタンを押し、内容を確認してみた。

「……………何だよコレは……………」

メールの内容を見た瞬間。 葉月の全身の力が抜け、ソファの上を力なく滑り落ちた。

内容はあまりにも単純、というより飾り気がなかった。 メール
の文章には『みつぎかな光崎神無』としか書かれてなかった。

おそらくそれがあの少年の名前なのだろう。 葉月は小首を捻つてしばらくそのメールを凝視した。 何十秒か経ち、

「ま、名前だけでもわかったただけ大漁か……………」

おそらく、これ以上メール送っても返事は返ってこないだろうと、葉月は悟った。

「そつか……………『みつぎかな光崎神無』か……………」

そう呟いてから、携帯電話を閉じ、今はもう着ていない窓際のハンガーにかけてあるロングコートのポケットの中に入れた。

一度だけ窓の向こうに写る少し曇った夜空を見たとき、体の力が抜け、フラツと体が揺れた。 眠い……………。 部屋に戻って寝よう。

（アイツはいつたいたいなんなんだろう。 今になっても、不思議な感覚が残っている……………）

それは、恐怖でも驚愕でもない。 そうは解っているけど、答えが出せないそんな感覚。

おそらく、意識しなくても脳裏に焼きついた彼の姿はこれからずっと忘れることはないだろう。 少なくとも、学園にいる間は。

それぐらい、葉月^{はづき}にとって意味のある存在だと思っから。

第二：浅葱色の少年 part 3（後書き）

毎回言ってることを今回もあえて言います。

遅くなつてごめんなさいwアクセス解析見ても、ホントこの小説読んでくれてる人って自分が思ってるより結構居るんだな〜って実感します。

みなさま、本当にありがとうございます！

今回もこれといった変更点はありませんね、しかし前の、つまり、書き直しの時にも書いていた、後半の部分がありません。

なぜなら、今回はなんと、第二の話にpart 4があるからです！これは前回なかったものです。書き直しの時にはなかったものが多く含まれる可能性があります。お楽しみにw

その予定でしたが、part 4に入れる新しい部分がちょっと長くなりすぎてしまったため、やはり前回同様、後半部分もここにいくことにします。

いきなりの予定変更をお許してください。

part 4は今月中に上げる予定です。それまで少々お待ちを

では、今回はこの辺で。

皆様の感想、評価、アドバイスを心からお待ちしております！
では、失礼します！

第二：浅葱色の少年 part 4

その頃、光崎神無は第二繁華街地区の路地裏にいた。この場所
は中等部の校舎全体に囲まれるように位置し、時刻ももう19時を
過ぎているが、人は多い。

彼はメールを送り終えたと表示された二つ折りの携帯を閉じ、一
息つく。

「よい子はもうお家に帰る時間だと思うぜ?」

不意にかけられた明るい声。声変わりは済んでいるが、随分と
若い声だ。神無は声の方向―路地裏の奥のほうに、目だけ向ける。
薄暗くて見づらい。しかし、声の主はわかっていた。

「お前か……。ここに何しに来た。ここは中等部の人間が利用
する場所だが」

「ああ? 別にいいだろ。高等部の人間くらい珍しいわけじゃね
えし、別に怪しまれることあねえよ」

そう言いながら路地裏の暗闇から現われたのは、やはり若い―青
年とも言い難い、弾ける電気のような黄色の瞳と、同じ色を持つ髪
を短く刈って逆立てた16、7歳くらいの少年だった。

神無はそんな相手を見て、そっけなく言う。

「その格好は怪しまれると思うがな」

「それだけはお前に言われたくねえよ」

しかし、神無の言うとおり、その少年の格好は奇妙ではあった。

少々派手なプリントがされた黒のシャツの上にデニムのジャケット着、ジーンズを穿いているまではいい。

だが、カチューシャ代わりなのか、どこにも繋がっていない無駄に大きなヘッドホンを頭につけていたり、腰に巻かれた7メートルはある異常に長いベルトが、彼の両足を軸にまるでスカートを模しているかのようにとぐるを巻いているというのは、異様や奇妙といわざるをえないだろう。

まあそれでも、中等部一年生でありながらバイクスーツのような格好で身を包んでいる彼が言えるような台詞でないことは間違いない。

「まあそれより、どうだ？ そっちの周りは？」

「子供がいっぱいだった」

「そりやそうだろうよ……てか、お前もだろうが」

「あと、妙に視線を感じることが多かった」

「お前のせいだよそれは！？ オレもおかしいと思うよそのバイクスーツっぽいの！！」

「……二度目になるが、お前の服装もおかしいぞ」

この場にどんな人間でもいい。とにかく人がいたとして、この二人がお前の服装おかしいと言い合っていたら、誰もが「両方だ」と言っただろう。

しかし、この場には誰も居ないどころかここに誰かが来る気配もない。

「うるせえよ！！……て、あ、そうだ」

言われた失礼な言葉にそう乱暴に言い返してから、黄髪の少年が何か思い出したように掌に軽く握った拳を当てる。

「どうした？」
「『どうした？』じゃねえよ、解ってんだろ？ さっきの闘技場で
のことだよ」

闘技場でのこと。つまり、彼が言っているのは、神無が葉月に
接触し、自分の連絡先をよこしたということだ。

「……なんのことだ？」
「お前なあ……」

神無の返しに呆れたようにため息を吐きながら自分の黄髪を乱暴
に掻き、「気付かないとも思ったのか」と付けたす。

「確かにアイツに似ていたけどよ、確証あるのか？」
「………ない」
「はあっ！？ お前、ふざけてんのか！」
「ふざけているつもりは無い。ただ……」

目を伏せて、思いふけるような表情をする神無、こいつがそんな
表情するのは珍しいと、黄色の髪の少年は思った。

「ただ……なんだよ」

苛立ちが増してるわけではないが、妙に強気な声でた。

「……いまはLEVEL3だそうだ」
「そうか……」

気のせいかな、その一言が妙に楽しそうな声に聞こえた。まるで、
いつ起こるかどうかわからない出来事に期待しているような。

神無があの子に何を思っているのかは誰にもわからない。喜怒哀楽どの表情もとばしりし、会話も最低限。行動も放浪の旅人のようであつたものはない。

（ホントによく解らねえやつだよ、コイツあ……嫌いじゃねえけどよ）

だが、いつまでもそのようでは困る。この少年は自分にとっていや、自分達にとって、大事な役割を持っているのだから。

「まあ、いい。今回こつちにきたのはその事を注意しに來ただけだ」

「そうか……お前意外と暇なんだな」

「やっぱ一発分殴ろうかなお前！！？あんなミール——」

「今はそつちの名前で呼ぶな」

断ち切るように、だけど静かに言われたそのたつた一言に黄髪の子は表情を変え、しまったというように口を閉じた。

「悪い……まだ慣れてねえんだ……えつと……神無^{かな}」

「……………それでいい」

そついうと神無は黄髪の子に背を向ける。機嫌を損ねたといふのではなく、もう話すことはないというような態度だ。実際、言ふべきことはもう全部言つたが。

しかし、あまり顔を合わせる事のない仲間同士だといふのに、この態度はないだろう。だが、自分も他の仲間も、彼が他人と喋ることを苦手とすることを知っている。

だから、不機嫌になることはなく、むしろ出来の悪い弟か後輩を見るようであつた頬が緩んでしまふ。

「じゃあ、オレはもう帰るわ。　じゃあな　神無」

踵を返してもと来た路地裏みちを行こうとしたところで、神無からの返事が来る。

「ああ、雷門らいもん」

「……………ぷっ」

その挨拶にも入らないくらい、淡々とした言葉に、思わず噴きだしてしまった。確認しなくても、神無が顔を不機嫌に顰めたのがわかる。

「何故笑った」

「あのなあ、オレたちは仲間だぜ？　苗字なんかで呼ぶなよ。　もともと、今の名前にはまだそこまでなじみがねえし、せめて名前で呼んでくれよ」

「……………わかった……………硝夜しやうや」

自分の名前を改めて言われ、満足そうに軽い足取りで、今度こそ足を進め、彼との距離を少しずつ離していく。

ちゃんと手を振って、しばしの別れも伝えながらだ。

第二：浅葱色の少年 part 4（後書き）

大分お待たせしてしまいました。申し訳ございません。
名前を改名して、加々美由亜でございます！

まあw私自身のことなどどうでもいいでしょうから、今回の内容についてw

今回は前の「呪をもらって魔法学園生活！！」では描かれなかったシーンです。（というか存在すらしてなかったかもしれないw）

新しいキャラも一人現われましたので、この回は、「彼らがどういうキャラか、どういう間柄か」というのをやりたかったんですが…
…まあ、いかにせん色々足りないwまあそれは今後の展開が色々ということw

次回から3話に突入します！

なんか妙に人気だった斐川の回ですので、皆様お楽しみにw

それでは短いですが、今回はこの辺で。

皆様の、感想、評価、アドバイスなどをお待ちしております！

それでは、失礼します！

第三：弱者の居場所 part 1

2067年4月20日。

そろそろこの学校にも溶け込めるようになった生徒が増えたこの頃、中学一年校舎の廊下をずかずかと歩く生徒がいた。

名前は斐川^{ひかわたいと}泰斗。まるで猫の様にギラついた金色の瞳をさらにギラつかせ、それにふさわしく思わせるがごとく青緑色の邪魔にならない程度にバツサリと切っている。

先ほどから眉間に皺を寄せながら金色の眼光を研ぎ澄ませているという、近づいた人間は即刺すと言わんばかりのような表情をしているせいか、斐川とすれ違う生徒は、自然と彼から離れ、彼に道を作る。

しかし、彼とすれ違う生徒がそうしてしまう理由は、別に彼の表情にあるわけではなかった。

「っっ……！」

ずっと我が道に真ん中を歩いていたせいか、反対側から来た生徒とぶつかってしまう。随分と身長の高い生徒だった。この校舎にいるのだから、に上級生ってことはなさそうだが、体格が良い。身長の高い斐川と比べると20センチも差があった。

「つてえなデメエ！ どこ見てんだ！」

ものすごい剣幕でいきなり相手に胸倉をつかまれ、斐川の体が微妙に浮き、爪先立ちになる。

こんなデカい相手にこんな事されたら、普通の生徒なら怯んです

ぐに謝るだろうが、いかんせん斐川という人間は非常にプライドの高い人間だった。当然の如く謝る、それどころか怯みもせず、むしろ睨み、言い返した。

「お前がぶつかってきたんだろうがっ！ 早く離せ、このクズ！」
「てめえ、この——っ！！！！？」

斐川の言葉に逆行し、拳を振り上げた彼だったが、斐川に突き出す前に、その行動をやめてしまう。その原因は——

「せ、『^{セイントセイバース}執行部』の腕章……！！？」

斐川の二の腕当りの左袖に括り付けられた、黒の太陽に白の三日月が刻まれている紋章が描かれた腕章に目が行ったからであった。

『執行部』。

数ある学園の委員会の中で、最も大きい『力』を持った、三つの委員会の一つであるそれは、学園の生徒の誰もが憧れる対象であると同時に、恐れられる対象でもあった。

理由はいくつがあるのだが、最大の理由は、その『力』が強すぎることにある。それは、実力がという意味でもあるが、一番はそこではない。問題は権力。

彼らには全校生徒の規律を守るため。一般の生徒では許されない『とある事』が許されている。

『とある事』、それは——

「解つたらとつとと離せ、クズ野郎！！」

斐川がそつと、しかし刺すように相手の腹部に手を添える。その瞬間、カツ！ と一瞬だけ斐川の掌が光が炸裂し、その衝撃に相手の生徒が2メートル飛んで仰向けに倒れた。

「!?!?」

蹲った少年の腹部から微妙な焦げ目が出ていて、明らかに普通の人間が出来る技じゃない。じゃあなんだと言われれば、答えるまでもない。魔法じゃない限りはこんなことは出来ない。そう、『執行部』に許されていること。

それは、『校内での攻撃魔法の自由』である。

もちろんそれなりの制限はあるが、例えば校内の生徒の校則違反などの行為を止めるためなら、基本的に魔法の発動は許される。

先ほどから斐川とすれ違ふ生徒たちが彼を避ける理由はそこにあつた。

「生徒への恐喝、暴力未遂。まあ、反省文4、5枚程度で許してやるから、後で適当な職員室に来いよ。あ、連絡を入れておくから、行かなければ処罰が足されると思え」

自分が倒した相手を全く見ずにそう告げて、自分は再び我が道を歩く。

（それにしても、こんな形でチャンスが恵んでくるなんてな……）

先ほどから明らかに不機嫌な表情をしている彼ではあるが、心の中は少々異なつた意味で湧き上がっていた。

その理由は、およそ一時間前、昼休みの頃へと遡る。

第三：弱者の居場所 part1（後書き）

またまたお久しぶりでございます！

少し早めの更新が出来たのですが、それでも遅いですねw
しかも、今回はちょっと短いです；

原因は次回にあるのですが、これが切る場所が見あたらず、妙に長くなってしまったのが原因なのです；

しかも新キャラも続々と出るので……た、楽しみにしてください！

さて、今回は

えゝ、まえの「呪をもらって魔法学園生活」の第三とはかなり異なります。

斐川設定がかなり違っていたり（一応キャラは変わってませんがw）、ストーリー展開もかなり違います（そのせいで次回がかなり長くなったのですが；）。

一応展開は自分の中で決まっています！中詰めってか、一部一部の表現のし型が思い当たらなかったりするのですよね……そこさえ何とかなれば……

では、今回はこの辺で！

皆様の、感想、評価、アドバイスなどを、心からお待ちしております！

第三：弱者の居場所 part 2

とある校舎の一室。その部屋は『セイントセイバース執行部』専用の、彼らに与えられた『部室』である。

通常の教室よりも広いが、置いてあるのはその部屋のと真ん中に口の字になるよう配置された複数の机と、周りに置かれたほぼ同数の椅子。あとは黒板、本棚、適当に置かれた感満載の観葉植物だけだ。

現在机の周りの椅子には4人の生徒が座っていて、各々が、自分の席の目の前に置かれた書類の山に目を通し、確認し、了承の印を押している。内容は主に備品の要請とかだが、殆どは問題のあるものではないと解っているので、皆スムーズのこなしている。

それは、今年入学したばかりの斐川もそうであった。彼も一応この書類に問題がないことを事前に教えてもらっているため。いちいち確認するもなしに黙々と書類一枚一枚に判子を押している。

「そーいや久代先輩、聞きました？ あの噂」

沈黙の空気の中、いきなりそう切り出したのは、斐川から見て左側の、黒板の前に位置する席に座っている鳶色の髪と目の持つ生徒だった。名前は安形静一。あかたせいいち中等部三年生。

うるさい人間ではないのだが、黙っていることが苦手な性格らしく、作業中に話を切り出すことが多い。いまの切り出し方も、この沈黙の空気に耐え切れず思わず漏らしたという感じがあった。

「む？ なんだ、噂とは？」

安形に話を振られて、男のような言葉遣いで聞き返した女生徒は、

くしろあまね
久代天音。 高等部一年生。

最近では見かけることが少なくなった黒色の髪をしていて、それをポニーテールにしている。 キリツと釣りあがった大きめの目も黒色をしており、すらつとした体格もさることながら、今では完璧に死語だが、大和撫子という言葉がぴつたりと当てはまる印象を持つ。

聞き返された安形は、そのままハンコを押す作業をしながら続ける。

「この前の、新一年生の入学式の話ですよ。 暴走したカメラを、入学したて、それも魔法名をもらったばかりの生徒が仕留めたって話です」

安形のその話を聞いて「ああ！」と判子を持ったままの拳で掌を打つ久代。 すぐにやってしまつた氣付いて慌ててハン力チで熱心に手を拭き始める。

この女先輩、しっかりした性格をしているのだが、妙に抜けていることが多い。 実はさつきから何回も左手ごと書類に判子をしており、左手はインクまみれだ。

「なにやってんすか……」

「なんでもないぞ。 で、その一年がどうしたんだ？」

呆れたようにため息混じらせながら言う安形に、拭き終わったハン力チを何事もなかったかのようにポケットにしまって必死に面作ろうとしながら返す彼女の行為に、斐川は内心で苦笑いした。 しかし、安形はそんなのはどうでも言いようにそのまま続ける。

「ありえないと思いませんか？ 聞いたところ、その一年は入学時からLEVEL3っていう類まれなるタイプだったみたいですけど、

それにしたって合成獣を倒せる實力があるとは思えないし……」

「ふむ……つまり、何かあると思うわけか？」

「ええ、普通に考えてありえませんか。まあ合成獣がどういうものだったかについてもよりまずけど……奈鳥会長はどう思います?」

安形が話を振った相手は、向かいの席（斐川から見て右側の席）に座っている、長い深緑の髪をした長身の少年だった。

後ろの髪を適当な感じに結っていて、黒縁の眼鏡をかけている。大きくもないが、小さくもないやや切れ長の目は、青みを帯びた灰色をしているのだが……いまその目は不機嫌そうに瞑られ、彼のこめかみはヒクヒクと動いている。

彼の名前は、
赤峰奈鳥。
あかみねすか
セントセイバース
我らが執行部の会長である。
人柄も

よく、事を計画的に、迅速に行える人間のため、生徒教師問わず人望も厚い……のだが、そんな彼にも一つの『アレ』が……

「……てめえ、何度言ったら解んだ……」

「あ、ヤバ……」

これから爆発しますと言わんばかりの押し殺した眼鏡の少年の声に安形がたじろぐ。

久代も危険を感じたのか、コソコソとその場から離れる。

斐川もそれが解つてその場を立ち去りたいのだが、いかんせん、斐川の席は窓側であり、逃げるならここから怪盗の如く窓からダイブしなければならぬ。久代のほうにも行きたいがそれには赤峰が安形の席を通らなければならなくなる。

そして、赤峰の怒りも待つてはくれなかった。椅子から立った彼の右手には現在、ソフトボールくらいの大きさの炎が。

[illegible]

ええええええ！！！！！」

「あぶつてうおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおお！！！？」

メジャーリーガーもビビるんじゃないかというような速さで投げられたそれは、ギリギリのところでは安形に避けられるものの、壁に当たると同時に爆発を起こし、彼をドアをぶち破る勢いで廊下へと放り出した。

斐川も巻き込んで。

「どおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおげこつ！！！！！！」

窓のほうに吹っ飛ばなかったのが幸いか、斐川は床を転がるだけで済んだ。本棚に頭を打ったが。

「相も変わらずか、あかみね赤峰会長」

と、またまた何事もなかったかのように部室に再入場する久代。普段はドジなくせに抜け目ない人間である。

赤峰は怒りが収まりきっていないのか、少々息を荒げながら答える。

「やかましい！ まったく……全員が全員とは言わんが、俺を名前で呼ぶなと何度言ったら……ん？ どうした斐川？ そんなところで思いっきり股を広げながらさかさまになって」

「アンタのせいなんですけど！！？ 止めてくれます俺がそんな才！ プンな変態なんじゃないかって言う発言！！！」

ここまで言っつてやっと気付いたのか、赤峰は「おお、そうか。」

スマン」とあまり反省はしてないような謝罪を斐川にした。

もういちいち言うのも面倒なので、斐川は「もういいです」と、起き上がって、服についた埃を払いながら席に座りなおす。同時に、髪は爆発、服はズタボロになった安形が部室に入ってくる。

「んで、あの一年生のことだったか？」

安形のことはどうでも良いのか、先ほどふられた話題を切り出す赤峰。逆に安形のほうも、あまり気にしてないのか、そのまま着席し、「ああ、はい」と、普通に返した。ここに入った時から毎度思っていたが、この人間はあまりにも適応力が高すぎだと思う。

「まあ、とにかくいろいろ矛盾が多くてですね……」

「ふむ……まあ俺も少しは聞いている。確かに、珍しいLEVE L3とはいえ、いきなり合成獣を倒せるほどの魔法が仕えるわけではない。非常に気になるところだが……おい、お前はどっ思う？」

赤峰は、斐川でもなく、久代でもなく、安形でもない、この場にいとある一人に話を振った。

位置的には、久代の右隣、赤嶺からは最も近い距離の席に座って……いや、突っ伏して寝ている男子生徒だった。

「……………」

「……………おい起きろ、かみさが神坂……………」

寝ているその生徒に、赤峰はまた大爆発3秒前といわんばかりの怒りを押し殺した声でいう。その声のどの部分に反応したかはわからないが、寝ていたその生徒はゆっくりと身を起こした。

彼の名は神坂明日真。かみさがあすま高等部一年生。目が殆ど隠れるほど長い藍色の前髪が印象的な愛嬌のある少年で、一応、この執行部の副

会長である。

「…………ふえ？ あ、起きてますよ。あれですよない？ 第二繁華街地区のナックのポテトが明日から半額にな」

「オイテメコラボケ全然聞いてねえじゃねえか。顔の下半分炭にすんぞデメエ」

「…………冗談ですよ。あれですよない？ 最近第三ターミナル前に建ったタツタの」

「神坂先輩、聞いてなかったなら素直に言ってください。会長の怒りがオーバーどころかインフニットしそうです」

目がもうヤクザどころかなにかの中毒患者のようになった赤峰を見た斐川が恐る恐る言う。神坂はそんな斐川と赤峰を見比べてからフニヤリと笑う。

「冗談だつて、斐川君、会長。あれですよない。…………篠原葉月君のことですよない？」

今までまだ寝続けているんじゃないかというくらいに細めていた目を少しずつ開けながら、話題の内容を言い当てる。どうやら、本当に起きていたようだ。

この神坂明日真という人間。普段かなりマイペースで、いつもヘラヘラしていて、すぐに人を食ったような態度をとる。だが、悪意というものが全く見えないというかなんとか、彼に何をされても、「まあ、神坂だからなあ」なんて勝手に勝手に終わらせ、許してしまいそうになる。

それは、先ほどまでマジギレしそうになっていた赤峰も実は例外ではなく、神坂がちゃんと話題を聞いていたことを知るとすぐに怒りが収まったようで、「ふんっ」と、乱暴な鼻息一つで済ましてしまった。

「ああそうだ。　　ったく……なんで話題一つ降るだけでこんなにもストレスを持たなきゃいけないんだよ」

「やゝ、すいませんねい」

「もついい。　　で、もう一度聞か……お前はどつ思つ？　　篠原葉月について」

そうですねい。　　と、考えていますと言わんばかりに下唇を軽くつまみ、そして数秒立てて結論を述べる。

「信憑性は怪しいですが、優秀な人材なら執行部ちゅうぶに入れるのが得策じゃないですかねい？」
「ッ！！？」

軽く放たれたその言葉に、斐川の体が電気ショックでも受けたかのようにビクツと震えた。　　誰も斐川のその様子には気付かなかつたようで、赤峰はふむ……と言つて自分でも気付いてもうないうちに彼に更なる追い討ちを仕掛ける。

「そうだな。　　俺もそう思つてはいた。　　そうだ。　　斐川は……おつ！！？」

赤峰が斐川にも尋ねようとしたとき、斐川はガタツ！　と勢よく席を立ち、廊下の方へと駆け出した。　　安形が「おい！」と制したが、まるで見えていないように、そのまま扉を勢いよく開け、そのまま廊下へと飛び出していつてしまった。

斐川の行為に、久代は怪訝な顔をする。

「どうしたのだ……？」

「解りませんけど……俺、連れ戻しに行つて来ます」

「いい。止めておけ」

安形が樋川を追おうと席を立とうとするのを、赤峰が静かな声でそれを制した。「なんでですか」と、納得いかない表情をする安形に、彼はまた静かな声で言う。

「いい機会だ。今期の一年の力を見てみようじゃないか」

第三：弱者の居場所 part 2（後書き）

はい！と言うことで、またまたお久しぶりです！

第三の part 2 ということで、書き足す前のやつには全くなかったものをつぎ込んだ話です！

そのせいで妙に長くなり、いつも以上に時間が掛かりました；

今回の内容について。

まず新キャラに触れましょう！

斐川に関しては、今は触れないでおきましょうw前のを読んだかたがたはある程度知ってるかもしれませんがw

えゝまず、赤峰会長から行きましょう！

この赤峰会長、したの名前がDQNで、かなり苦勞されている方ですw

前々から、DQNな名前は挑戦してみたくてwえ？皆そうだろ？あ、すいませーん。ちよっとスナイパーなかたいらっしゃいますかゝ？

ちなみに、赤峰です。時々赤嶺になっていたら、ちよっとご報告お願いしたいです；

次に、安形。

典型的な普通の男子も書いてみたくて彼を出したのですが……彼も彼なりに変ですねw適応力が高すぎてwもはや普通じゃないw

次に久代。

あまり女の子成分が少ないこの作品には貴重な女の子キャラですね

！（問題発言w

クールでマイペースなのに、抜けたところが多い。逆もしかりと言
うのを考えて書いてみたのですが、如何だったでしょうか？；
まあ、今回は長いとは言え、結局はまだあまり表現し切れてないと
ころも多いので、なんとも言いがたいものですがw

最後に、神坂。

多分、彼が一番キャラが濃いのかもw

最もマイペースで、掴みどころがない。もしかしたら、彼がこの作
品のラスボス！？

なのかなあゝ……（オイ

さてwいつも以上にここも長くなってしまいました。本当にスイマ
セン；

そして、いつも読んでくださっている読者様！本当にいつもありが
とうございます！

自分が知らないところで読んでくださる方々がいるって言うのを実
感するのって、本当に嬉しいものですね！

では、今回はこの辺で！

皆様の、感想、評価、アドバイスを心からお待ちしております！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6482j/>

呪をもらって魔法学園生活!!(書き足し版)

2010年10月25日15時11分発行